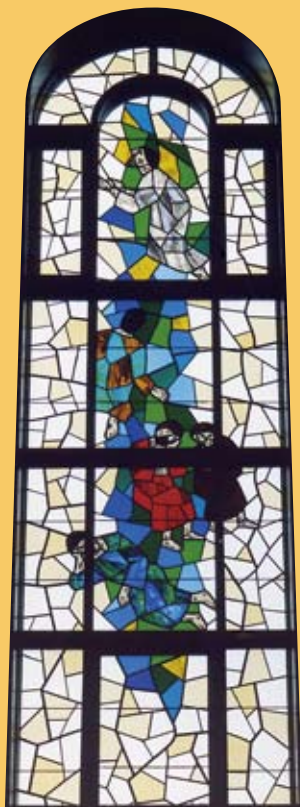


大学礼拝  
説教集

第 13 号



2009

東北学院大学

## 表紙の絵について

泉キャンパス礼拝堂のステンドグラスは、正面に一枚と左右両側面にそれぞれ四枚ずつ、全部で九枚です。その九枚は連作を成していて、全体がイエス・キリストの生涯を描いています。今回の絵は連作の八番目で、「ゲツセマネの祈り」です。

イエス・キリストは、「最後の晩餐」の後オリーブ山に行き、ゲツセマネと呼ばれるオリーブの園で激しく祈りました（マルコによる福音書14章32-42節）。そして祈り終えた後、捕らえられ、受難の道へと赴くことになるのです。

大学礼拝

# 説教集

第 13 号

2009

東北学院大学

# 目次

卷頭言	宗 教 部 長	佐々木 哲夫	4
真に選ばれた人	理 事 長	平河内 健治	6
発酵食品サミット	学 院 長 (大学長)	星 宮 望	11
彼らの生涯の終りを見て	仙台東一番丁教会牧師	保 科 隆	15
この時代はしるしを求め	仙台東六番丁教会牧師	高 橋 和 人	20
あなたもしなさい	宗 教 部 長	佐々木 哲 夫	24
人々からでもなく、人を通してでもなく	大学宗教主任	永 井 義 之	30
熱き永遠	大学宗教主任	佐々木 勝 彦	35
これはわが体なり	大学宗教主任	北 博	41

パウロのメッセージと社会倫理	大学宗教授主任	出村 みや子	47
空しさの中で	大学宗教授主任	村上 みか	53
アロンの子牛	キリスト教学科長	原口 尚彰	58
神の言葉と共に生きる	経済学部教授	佐藤 邦廣	63
共にいます神	経済学部准教授	松村 尚彦	68
最初の聖書と讃美歌の日本語訳	工学部教授	星宮 務	73
盲人バルティマイ	工学部准教授	長島 慎二	78
国籍は天にあり	文学部教授	佐藤 司郎	82
ENGLISH CHAPEL SERVICE	宣教師・文学部教授	D・N・マーチー	89
編集後記	大学宗教授主任	北 博	90

## 巻頭言

宗 教 部 長 佐々木 哲 夫

二十歳から成人として扱うとの慣習が聖書に記されています。例えば、貢物は二十歳から満額が示されていますし、特に、男子は二十歳から兵役も課せられます。まさに、二十歳は、社会を背負ってたつ出発の年齢です。他方、今日、大学生は二十二歳までキャンパスに留まります。心理学者エリクソンの言葉を借りるならば、モラトリアムの時を過ごしている、即ち、社会に出ることを猶予されている、徴兵猶予の時を過ごしています。これからの人生をどのように歩んでゆくか、人生の羅針盤をにらみながらその方向を定める重要な期間になっているからです。東北学院大学は、そのような学生たちに、毎日の礼拝を通し、聖書の言葉を伝えていきます。「主を畏れることは知恵の初め」「地の塩、世の光」「求めなさい。そうすれば、与えられる」など、聖書の言葉は、人生の羅針盤であり、また、人生の原点となります。

さて、聖書では、二十歳から一人前の社会人として扱うということですが、貢物の満額である銀

五十シエケルは六十歳までとされています。六十歳以上になりますと、それはぐんと値下がりは銀十五シエケルになります。六十歳以上に優しい社会です。今日の老年医学では、高齢者の定義として、六十五歳以上、その中でも七十五歳以上を後期高齢者、八十五歳以上または九十歳以上から超高齢者とされています。いずれにせよ、大学礼拝を原点に据える者の原点は変わることがありません。この『説教集』が、世代を超越する我々の原点を示すものとして用いられるように願っております。

# 真に選ばれた人

理事長 平河内 健 治

マタイによる福音書、第二十二章一節〜十四節

1 イエスは、また、たとえを用いて語られた。2 「天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている。3 王は家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、来ようとしなかった。4 そこでまた、次のように言いつて、別の家来たちを使いに出した。『招いておいた人々にこう言いなさい。』5 「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠つて、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください。」6 しかし、人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、また、他の人々は王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまつた。7 そこで、王は怒り、軍隊を送つて、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払つた。8 そして、家来たちに言つた。『婚宴の用意はできているが、招いておいた人々は、ふさわしくなかつた。9 だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴につれて来なさい。』10 そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになつた。11 王が客を見ようと入つて来ると、婚禮の礼服を着ていない者が一人いた。12 王は、『友よ、どうして礼服を着ないでここに入つて来たのか』



と言った。この者が黙っていると、<sup>13</sup>王は側近の者たちに言った。『この男の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯しりするだろう。』<sup>14</sup>招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。』

夏休み期間中の九月二日・三日の二日間、大学の教職員修養会が開かれました。学生さん対象の修養会とはまた別の修養会です。毎年一回蔵王などの施設に一泊して行うもので、聖書に基づく建学の精神の体得と建学の精神を体得した人材育成を目指しての教育環境整備について学び、教職員同士の交流と友情を深めるリトリートであります。上智学院理事長の高祖敏明カトリック教会司祭を講師として招き、「最近の高等教育政策の動向とキリスト教教育の可能性」と題して、発題をしていただきました。

開会礼拝を私が担当し、ヨハネによる福音書第十五章十二節から十七節まで（新約聖書一九九頁）をテキストの一部として引用しました。そこにはこう記されております。「わたしがあなたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。

あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

これらは十字架上で死に、復活する主の永遠の命に至る働きを暗示し、愛の掟として弟子たちに向けてなされたイエスの命令であります。しかし、神の宮として建てられた東北学院に奉職する教職員にもそこで学ぶ学生生徒諸君にも向けられた命令として受け止めることができるのではないかというお話をしました。私たちは僕ではなく友としての関係にキリストによってすでに導かれ選ばれている存在であるというのがそこでの信念でありました。私たちはどのような立場であれ、共に仕え合う友の關係に導かれています。東北学院という教育共同体に自分の意思で入学や就職したことは確かではありますが、聖書によれば「神の摂理」によって、神に選ばれて入学や就職をしたと信じることができます。キリストによって選ばれ、愛されていることを知り、キリストとのつながりにおいて、自分を捨てる中で、互いに友としてつながり、キリストの喜びが自分の内に満たされることを祈ったのであります。

しかし、高祖先生は開会礼拝の直後の発題の中で、冒頭のイエスの「婚姻のたとえ」の最後の聖句「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」に言及し、さらに謙虚な姿勢が厳しく求められて

いることに触れました。私にとっては「選ばれている」ということがどのようなのかを考える良いきっかけとなりました。このたとえ話から、神の支配する国の価値観、キリスト教大学が求められている価値観というものがどのようなのかを、さらに、深めることができます。

ここには、王が息子の王子のめでたい結婚の披露宴に招いていた者に、いざ婚礼の準備ができ、家来を呼びにやった時、人々はそれを無視し、一人は畑にでかけ、一人は商売に出かけ、また、他の人々は王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまったとあります。王様と喜びを共有するのは無駄な時間とばかり、それぞれの打算や利益のためにこれを無視してしまいます。

私は九月最後の週末に、タイの女性と国際結婚をした教え子の結婚式と披露宴に招かれ出席してきました。同じく翌週の十月最初の金曜日の夕方には商売をしている教え子の結婚の披露宴に招かれ出席してまいりました。さらに十一月には、甥の結婚を祝いました。三ヶ月連続のお祝い事に恵まれました。これらを直前にことわっていたらどうだったでしょう？週末は自分にとっては休息と研究時間確保に大事だし、ご祝儀の出費が二週連続はきついとばかり、直前に断ったらどうだったでしょう。教え子も家族も怒り心頭に達するかと想います。七節に、無視された王は怒り、軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、町を焼き払ったとあります。如何に怒りが大きかったかがわかります。

八節で、王は招いた人はふさわしい人ではなかったと、今度は家来たちに通りに出させ、誰かま

わず連れ来てよいと命令します。中に礼服を着てこなかった者がいました。当時は婚姻の礼服は主催者が用意したとのことですが、それを着ていなかった。何の宴（うたげ）か理解できず、王の「友よ！どうして礼服を着ないでここに入ってきたのか」という問いに応答できず、ただ黙っているだけの男は外の暗闇にほうり出されます。

キリスト教大学では神の喜びを自分の喜びとするという価値観が最も大事であることがここで示されています。世の打算で動くのではなく、神を喜ばせる働き、神の国の価値観で共にそれぞれの学習を、共々に、務める喜びを分かち合うことが求められています。招かれている意味を無視したり、理解できない時、「真に選ばれた人」には成り得ないということがあります。

# 「発酵食品サミット」

学院長（大学長） 星 宮 望

マタイによる福音書、第六章二五～三四節

25「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。……」

33何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。……」

聖書のこの箇所は、「山上の説教」あるいは「山上の垂訓」（5：1―7：29）の一部としてよく知られている聖句です。人生の拠り所を富に求め、それを自らの力で獲得し、将来にわたって確保しなければならぬと考えるとき、人は思ひ悩むこととなります。イエス様は、むしろ富についての思ひ悩みを捨てて、神に全面的な信頼を置いて生きることを勧めておられます。特に、日常の生活で不可欠な食物と衣服について言及しておられます。

私たち、現在の日本においては、日々の食べ物が豊かに与えられていることに感謝したいと思ひ

ます。先人の長年の努力によって、豊かな食料が与えられているとともに、その加工・保存などにおいて優れた工夫がされてきました。ここでは、その一部について考え、その恵みに感謝したいと思います。

平成19年11月17日（土）に福島市で東北学院大学文化講演会を開催しました。これは、本学が地域社会と連携を深めながら、社会人の教養を高め、生涯教育のニーズに対応することを目的として、宮城県を除く東北5県の県庁所在地において毎年、巡回方式で開催しているものです。このときには、講師として、東京農業大学応用生物科学部教授の小泉武夫先生をお迎えして、『発酵の神秘』——発酵と人類の知恵——と題したご講演をいただきました。小泉先生は、日本経済新聞に長期間にわたって連載された「食あれば楽あり」で著名であるほか、NHKの教育TVの番組に出演されたことや、著書「食の世界遺産」などで知られているほか、地元福島県のご出身でもあり、当日は超満員の聴衆の前で講演されました。ご講演では、今では日本で幻になりつつある青森県の伝統的な発酵食品「アケビのなれ寿司」や、石川県で長年伝えられてきた猛毒のフグの卵巣を発酵させた珍味「ぶぐの子糟漬」、世界で最も硬い食品であり、かつ発酵食品である「かつおぶし」などの作り方などについてそれらの特徴をわかりやすく話されました。また、身近な話題では、全てのビタミンが含まれる健康食品の優等生である「甘酒」は江戸時代におけるリンゲル液の役割をしており、夏バテ防止のための健康食品の元祖であったことや、我々の日常食品である「納豆」は、アミノ酸など

栄養が豊富な発酵食品の優等生であるばかりでなく、これを赤ちゃんに食べさせる実験をしたところ、本能的にすべての赤ちゃんが食べたことなど・・・現代の我々が見落としている多くの貴重な情報を教えていただきました。このご講演の概要は、本学の印刷物である「ウーラノス」Vol.27 (Feb. 2008) に記載されていますので、まだご覧になっていない方は、見ていただきたいと思います。

このご講演の時に、小泉先生から、平成20年3月29・30日に、秋田県横手市において、「全国発酵食品サミットin横手」を初めて開催するのは是非出席するようにとのお誘いを受けました。そこで、3月29日(土)に、家内とドライブを兼ねて横手市の秋田ふるさと村で開催された「全国発酵食品サミットin横手」に参加してまいりました。大会のテーマは「発酵の世紀 ―発酵食品は人類を救う―」というもので、横手市が主催したものでした。オープニングセレモニーでは、大きな会場に超満員の800人を超える参加者を集め、大変な盛況でした。小泉先生による基調講演や記念講演、パネルディスカッション、トークショーなどのほかに、酒蔵見学会や物産展など、多彩なイベントが行なわれ、大きな成功を収めたようです。このような活動は、横手市に限られるものではなく、我々も知恵をしぼって、身の回りにある伝統的な日本の発酵食品の良さを引き継いでいきたいものと思いました。日本は、世界中で最も優れた「発酵食品の先進国」であります。そして、東北学院大学が存在するこの宮城県、仙台市でも、発酵食品をはじめとする伝統食品の良さがありま

ですので、若い学生諸君にもその良さをご理解いただきたいと思います。むしろ、宮城県は、味噌・醤油・酒などの発酵食品を含めて、大変めぐまれた農産物・海産物・・・など、種々の「食文化」の蓄積があり、日本を代表する伝統と実績を有していると言って良いでしょう。これらを背景として、出来ることならば、本学でも、数人の教員がすでに取り組んでいる斬新なバイオ関連の研究を進展させて、「食品」や「健康」などの分野で新たな展開をはかっていければ素晴らしいと思います。

このような先人から受け継いだ素晴らしい「発酵食品の遺産」を有効に受け継ぐとともに、これらをヒントにして地域貢献の実をあげていきたいと思えます。

我々が、このように恵まれた食環境のもとに育まれていることを忘れたり、これからの前向きな研究・貢献などを忘れて「何を食べようか何を飲もうかと、思い悩む」ことのないようにしたいものです。



# 「彼らの生涯の終りを見て」

仙台東一番丁教会牧師 保科 隆

へブライ人への手紙、第一三章七く八節

7あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生涯の終りをしっかりと見て、その信仰を見倣いなさい。8イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。

毎年、教会の暦では十一月の第一主日は、永眠者記念礼拝の時と定められています。この日は特に、聖書のみ言葉から人間の死ということについてともに聞く礼拝が守られています。私自身も以前に仕えていた教会では、そのような時として十一月の第一主日の礼拝を守った経験があります。今朝は、みなさんとともにそのような教会の暦のことも考えながら、人間の死、人生の最後について考えてみましょう。人間の死は、誰にでも共通に訪れるものでありながら、誰にでも共通にあまり考えない、いやむしろあまり考えたくないことでもあります。特に私も日本人にとって死は、穢れと昔から考えられ、また忌むべきもの、嫌うべきものとして考えられてきた面があります。例えば忌中とか忌引きという言葉がありますが、「忌」という言葉の意味は「嫌う」です。しかし、

他方において死生学という分野の学問も最近はあり、死の教育ということも言われ、大学の授業の中に「死の教育」を取り入れている場合もあります。つまり、死をタブーのようにすることなく積極的に考えていこうとするものです。

「ヘブライ人の手紙の十三章七節を読んでもみます。「あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生涯の終わりをしっかりと見て、その信仰を見倣いなさい。」と書かれています。彼らとは、当然「神の言葉を語った指導者たち」です。その生涯の終わりをしっかりと見て、その信仰に見倣うようにとの勧めの言葉です。

さて今年の一〇月に、俳優の緒方拳さんが亡くなりました。肝臓癌だったそうです。七一歳でした。緒方さんは五年ほど前から、すでに医者からは肝臓癌であることを告げられていたのですが、そのことを家族の者にしか知らせずに、俳優としての仕事を続けました。緒方さんが死なれてから後で現在も放送されているテレビドラマもあります。癌という病と闘いながら死を覚悟の上での演技であったことをその番組を見ながら思います。俳優は演技の上では、様々な人物になることができますので何回でも死ぬことができます。緒方さんも、以前に「太閤記」というテレビのドラマで、豊臣秀吉を演じました。そして、秀吉として死にました。しかし、それはあくまでも演技の上でのことです。しかし、一人の人間として死を迎える時は一回だけです。そして、病床での緒方さんの最後を家族の方々と一緒に見届けた、同じ俳優で年齢も同世代の津川雅彦さんをして、自分もあ

よくな最期を迎えたいものだ、と言わせたほどでした。そこに一人の俳優としての最後の迎え方があるのではないだろうか。

ここで「彼らの生涯の終りをみて」と言われる「彼らは」俳優ではありません。神の言葉をあなた方に語った指導者たちのことです。例えば、パウロという人のことが思い浮かびます。ただし、聖書を読みましてもパウロがどのような最後を迎えたのかについて直接記しているところはありません。いくつかの聖書の言葉から推測が出来るのみです。使徒言行録の一番最後のところには、このように記されます。「パウロは、自費で借りた家に丸二年間住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。」(使徒言行録二八章三〇〜三一節)パウロは、第三伝道旅行の最後にエルサレムで捕らえられ裁判かけられます。しかし、彼はローマの市民権を持っていたために皇帝に上訴して、ローマに護送されることとなります。そして、ローマに到着以後は、割合に自由な生活をしていたかのように使徒言行録の記事からは読み取れます。しかし、他方において使徒言行録の中には次のような記事もあります。「幾日が滞在していた時、ユダヤからアガポという預言する者が下って来た。そして、私たちのところに来て、パウロの帯を取り、それで自分の手足を縛って言った。『聖霊がこうお告げになっている。』エルサレムでユダヤ人は、この帯の持ち主をこのように縛って異邦人の手に引き渡す。わたしたちはこれを聞き、土地の人と一緒にあって、エルサレムには上らないようにと、

パウロにしきりに頼んだ。その時、パウロは答えた。『泣いたり、わたしの心をくじいたり、いたいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。』パウロがわたしたちの勧めを聞き入れようとなないので、わたしたちは、『主の御心が行われますように』と言って、口をつぐんだ。(使徒言行録二一章一〇～一四節) つまり、この箇所から読み取れることは、パウロにとってエルサレムに行くことは死ぬことを覚悟の上のことだったのです。とすれば、「彼らの最後を見て」の最後とは、「彼らの死を覚悟の上の最後を見て」ということではないでしょうか。さらに、エルサレムへ向かう以前のこととして、エフェソの教会の長老たちとの、ミレトスの別れと呼ばれる場面があります。そこでもパウロは、長老たちに次のように語っています。「しかし、自分の決められた道を走り通し、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証するという任務を果たすことが出来さえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。」(使徒言行録二〇章二四節)

死を覚悟して生きるということでは、俳優の緒方さんも伝道者パウロも変わらないかもしれません。しかし、違いもあります。パウロには、「主イエスの名のためならば」との思いがありました。主イエスのためならば、自分の命を少しも惜しいとは思わないということです。主イエスの名とは、十字架と復活の主イエスの名です。東北学院もこの「主イエスの名によって」今から一二〇年ほど前に建てられた学校です。最初は仙台神学校でした。神学校とは、神の言葉を語り伝える牧師を育

てる学校です。そして、神の言葉を伝え語ってくれる多くの伝道者を生みだしてきたのです。その最後の姿をしっかりと見て、その信仰に倣いたいものです。

(二〇〇八、一一、一七 土樋)

# 「この時代はしるしを求める」

仙台東六番丁教会牧師 高橋和人

マルコによる福音書、八章十一〜十三節

「ファリサイ派の人々が来て、イエスを試そうとして、天からのしるしを求め、議論をかけた。」

12 イエスは、心の中で深く嘆いて言われた。「どうして、今の時代の者たちはしるしを欲しがるのだろう。はっきり言っておく。今の時代の者たちには、決してしるしは与えられない。」<sup>13</sup>そして、彼らをそのままにして、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。

最近は何かに個人認証が必要になってきました。金融機関だけでなく、買い物をする時でも「免許証、お持ちですか。お借りできますか。」といわれることがあります。また、その反対にこういうこともありました。最近少し体調を崩して新しくできた病院にまいりました。保険証を出して、番号札を渡されます。「番号でお呼びしますから」といわれました。小さな、何人も患者のいない時だったのですが、名前を呼ばないのは個人情報保護を配慮しているためのようです。

わたしは牧師ですのでよく入院している人を訪ねます。このころは面会の手続が多くなりました。

どういふ関係か、また本人が面会を求めているかという確認を取ることがあります。時代がら必要なことでしょう。

今は本人確認と同時に個人情報保護が求められます。誰であるかを確かめなければならぬことと、その反対に誰であるかを明らかにしてはならないことの両方が必要です。ですから自分が誰であるかを証明するしるしを持っていなければなりません。免許証や保険証を持っていなければどんなに自分のことを自分だと言ってもそれは証明にはならないのです。本人が目の前においても本人を証明できないのです。

主イエスは「今の時代の者たちはしるしを欲しがらう」といわれました。それは今も昔も変わらぬところなのでしょう。ファリサイ派の人々は主イエスに天からの「しるし」を求めました。主イエスが誰であるか、神から遣わされたものなのかどうか、その証明を要求しました。それは信用していない証拠でした。ところで、私たちの生活の中では、本当に大切なことは証明できないことが多いのです。人を愛することもそうです。愛を確かめなければならぬ、「しるし」が欲しいという思い自体がもう愛を失ってしまっていることになっていくことがあります。

民話にこういうのがあります。ある貧しい母子がいて、母親はいつも自分は食べないで息子にばかり食べものを勧めていた。息子は母親が何か別のよいものを食べているのではないかと疑って包丁で胃を裂いたが何も入っていません。息子は嘆き「包丁かけたか、ホーチョーカケタカ。」と

泣き続けて、ホトトギスになったというのです。母の愛情が分かった時にはもうとり返しのかないことをしてしまっていたのです。

主イエスは「しるし」を拒否されます。証明によって信じることは本当の信仰とはいえないのです。そして、神の存在もしるしによって確かめることのできないことです。たとえば、わたしたちが自分を証明するためには照合できる自分の情報を相手登録していなければなりません。しかし、神は人間を超える方ですから照合するものをわたしたちが手にしているわけではないのです。別の言い方をすると、人間は神を計ることができない物差しを持っているわけではありません。そのことが分からないと自分の物差しで神を計って、自分の都合のよい神を選ぶか、神などいないといってしまうのです。

しかし、神はご自分を「しるし」によってではなく、愛する子イエス・キリストを遣わすということによってお示しになりました。イエス・キリストは神の御心そのものであり、神と一つの方であり、しるし以上の生きた存在です。そして、この方を知るために必要なのはその語りかけてくださることを聞くことです。神は聖書を通して語りかけておられます。とりわけ主イエス・キリストの物語によって語りかけてくださっています。愛することを伝えるのは物やしるしではなく、相手に聞かれるまで誠実に語りかけることだからです。神はこの語りかけを主イエスの存在そのものと、それを証しする聖書と、それを受け継ぐ礼拝によって、明らかにされています。この語りかけを聞



き受け止めることが神を知ることになるのです。

そして、主イエスの姿を知り、聖書の語るところを聞こうとするともう一つのこと明らかになってきます。それは、神もまた人の思いに耳を傾ける存在であることが分かることです。なぜなら、神が人となられたことは、神が人の思いを知りそこに立ってご自分のものとされることだからです。神はキリストによって語りかけ、聞き入れてくださる。聖書は神がわたしたちに与えてくださった対話の書物です。

「しるし」を求め、しるしに頼ることは対話を失うことになります。対話なしに本当のその人を知ることはできません。対話によって、心開かれ、はじめて心に触れることができるようになります。ですから、対話なしに心からその人を受け入れ、信じることはできません。対話なしに愛すること、愛を伝えることはできないのです。民話の母子の悲劇もそこにあります。

主イエスが嘆いた「しるしを求める時代」、現代はまさにこのしるしを求める時代になっています。そして現代の社会の持っている問題も対話を失っていることです。対話が失われた時、人は自分を受け入れてくれるものをなくします。神は主イエスを遣わされたこと、また主イエスが語られたこと、主イエスのなさったことによって、「しるし」を越えた「対話」をわたしたちにもたらされました。それゆえに、心開いて聖書の言葉に耳を傾けること、そこからわたしたちと神との対話も開かれて行くのです。

# 「あなたもしなさい」

宗 教 部 長 佐々木 哲 夫

ルカによる福音書、一〇章二五―三七節

25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」 26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、 27 彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」 28 イエスは言われた。「正しい答えだ。それを實行しなさい。そうすれば命が得られる。」 29 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。 30 イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った、 31 ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。 32 同じように、レビ人もその場所に行って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。 33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、 34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、

包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。<sup>35</sup>そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』<sup>36</sup>さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。』<sup>37</sup>律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

エルサレムからエリコへ下ってゆく道のことです。その道は、無味乾燥の大地が続く荒れ野の道です。追いつきに襲われても不思議ではない場所でした。半殺しの目に遭った旅人は、恐らく、道端に倒れたまま気を失っていたのでしょう。死んだように横たわっていました。そこを通りかかったのが、ユダヤの祭司とレビ人でした。両者とも、神殿に仕えるユダヤ教の専門家です。彼らは、倒れていた旅人を避け、道の反対側を通り、この場をやり過ぎたのです。恐らく、両者の頭の中を駆け巡ったことは、死体に触れると汚れてしまうという旧約聖書の言葉だったと思われます。例えば「野外で剣で殺された者や死体、人骨や墓に触れた者はすべて、七日の間汚れる」(民数一九・一六)からです。清めの儀式ができるのはエルサレムの聖所であり、遠ざかる旅の途中の祭司とレビ人にとって、死体らしきものに近づくことは出来ないことでした。彼らは、倒れていた旅人の隣人になり得なかったのです。隣人になったのは、ユダヤ人から異端者として忌み嫌われていたサ

マリア人でした。ユダヤ人にとっては、想像すら出来ない展開でした。このサマリア人は、労働賃金二日分に相当するデナリオン銀貨二枚を払ったのですから、宿屋の主人に対しても、理にかなった対応をしています。非難されるところのない振る舞いでした。

さて、この話は、「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」との質問で閉じられています。祭司カレビ人かサマリア人かを、問う質問です。おそらく、イエス・キリストは、敢えて、この喩えに律法学者を登場させなかったのでしょうか。なぜなら、隣人とは誰かという質問を投げ掛けた相手が律法学者だったからです。律法の専門家は、質問に対し即座に「その人を助けた人です」と答えています。サマリア人と名指しせず「その人を助けた人」と表現したところに、サマリア人差別の根深さが窺えますが、それはさておき、彼の答えは正解でした。

本日の聖書個所の最初を見ますと、事の始まりは「律法の専門家がイエスを試そうとした」ことでした。イエスの弟子たちは、イエスが救い主であると民に伝えていました。律法学者には、それがユダヤ伝統からの逸脱であると思われるのです。ですから試そうとして「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」と質問したのです。イエス・キリストの定める「神の国への入会資格」が、ユダヤ教の伝統に納まるものならばいいのですが、外れたと判断されるならば、イエス・キリストと彼の弟子たちにもサマリア人と同じレッテルが貼られるということでした。

この質問に対し、イエス・キリストは「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と問い返します。律法の専門家ですから、彼は即答します。申命記六章五節の言葉「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」を引用します。しかも、「思いを尽くして」を付け加え、まるで、律法学者が理性をもって主を愛していることを自慢するかのような答えでした。博学な律法学者は、さらにもう一つ、レビ記の一九章一八節の後半部「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」を付け加えたのです。それは百点満点の答えでした。イエス・キリストは言います。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」。

ところが、律法学者は、イエス・キリストの言葉「それを実行しなさい」にさらにつけ込むスキを見い出しました。当時、イエス・キリストは、悔い改めた罪人だけでなく、悔い改める前の罪人にも神の国への招待を告げていたのです。例えば、罪人として冷遇されていたザアカイに、イエス・キリストは、親しく言葉を掛けていたのです。ユダヤ人の伝統によるならば隣人と考えることの出ない人々に、イエス・キリストは、神の国への招きを告げていたのです。律法学者は、自分の正しいことを示そうとして「では、わたしの隣人とは誰ですか」と質問を投げ返したのです。もし、イエス・キリストが、罪人も隣人の枠にいれるような答えをしようものならば、モーセの契約を反古にする異端者と断定したことでしょう。しかし、イエス・キリストは、その質問に直接的に答えることなく、たとえ話を語り始めたのです。そして、「隣人とは誰か」について「あなたはこれ

三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と尋ねたのです。律法の専門家家は「その人を助けた人が隣人である」と答えました。それもまた正解でした。イエス・キリストは、再度語りかけます。「行って、あなたも同じようにしなさい」。

さて、イエス・キリストは、喩え話によって語りました。ですから「行って、あなたも同じようにしなさい」と命じる時、それは、道端にうづくまる旅人に親切にすることと限定されたものではなく、聞く者一人一人の判断に委ねられたものとして語られました。また、律法の専門家との対話へと展開するに到り、喩え話の真意が、私たちに対しても顕にされたのです。すなわち、「助ける」ことから「隣人は誰か」との課題に敷衍されたのです。それは、イエス・キリストの言葉「行って、あなたも同じようにしなさい」が今日の私たちにも語りかけられた瞬間でもあります。私たちも自問自答することでしょう。誰にどのようなことをすれば「同じようにすることになるのか」と。実行するまでに、考えるべき様々の問いが出てきます。それを自問自答している間に、いつの間にか、私たちも、道の反対側を通り過ぎるのではないかと考えさせられます。ところで、私たちは、祭司でもなく、レビ人でもなく、ましてや、良きサマリヤ人でもなく、あの倒れていた旅人であったとしたらばどうでしょうか。想像もつかない良き行いをした良きサマリヤ人に関し、イエス・キリストをおいて、それに該当する人物を挙げることは困難です。サマリヤ人の喩えには、自らの身を捧げ、倒れた者のための救いを成し遂げられた十字架のイエス・キリスト自身が示され

ていたのです。であるならば、そのイエス・キリストに助けられた者は、「行って、あなたも同じようにしなさい」の言葉に応え得る手がかりを、自らの経験の中に持っている者でもあるのです。「あなたも同じようにしなさい」の言葉は、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」(マタイ七・一二)の言葉と重なりあって、私たちのうちに響いてくるのです。

# 人々からでもなく、人を通してでもなく

大学宗教研主任 永井義之

## ガラテヤ書、第一章一節

「人々ひとびとからでもなく、人ひとを通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者ししの中なかから復活ふっかつさせた父ちちである神かみとによって使徒しととされたパウロ。

2008年下半期で日本に関するニュースとして特筆されるのは、ノーベル物理学賞と化学賞を計四人の日本人が受賞するとの発表がノーベル財団からあったことでしょう。一度に四人もの受賞者ということは今までにない快挙であると連日新聞、ニュースで伝えられました。物理学賞は素粒子物理学の小林誠、益川敏英、南部洋一郎の各氏、化学賞はくらげの発光物質研究の下村脩氏でした。しかし、驚いたのはいずれも三十年近く前の研究成果が今認められたということです。ノーベル賞を受賞するには長生きしないとだめだという皮肉な声もニュース解説では語られたものです。

日本人として慶賀すべき、喜ばしいニュースではありましたが何度か同じニュースに接しているうちに、一つのことか次第に気になるようになりました。日本のマスコミでは四人の日本人受賞者といっているのですが、海外のメディアでは、南部氏は1970年に米国籍を取得し研究の本拠地



も国籍も米国なので米国人と報じているのです。また化学賞の下村氏は国籍は日本だが米国に住み研究の本拠地も米国なので「米国」とカウントしているらしい。純粹に日本人は二人なのか、三人なのか、それとも四人なのか、まことに混乱してきました。早速、新聞にも解説の記事が載りました。それによると、日本の文部科学省では、南部氏に関して普段は日本人としているけれど、白書などの国別集計では受賞時の国籍で数えるため南部氏は米国人となり、日本人は計三人ということになるようです。さらに賞を出す側のノーベル財団では、発表時の国名を「そのときの活動拠点」としており、南部氏は「米国」だし、日本国籍を持つ下村氏も「米国」となると考えているようです。すると日本人は二名ということになります。

「日本人が四人もノーベル賞受賞」という新聞の大見出しは何だったのででしょうか。文部科学省の「普段は日本人とみなすが白書など公式文書では国籍で数える」というのもよく分からない。日本にいる外国人の声を思い出しました。「私たちは長く日本に住み、日本文化を愛し、自分を日本人だと思っているけれど、日本人は私たちを外人と呼んで日本人の中に入れてくれない」という嘆きの声です。彼らの中には日本国籍をとったものもいます。それでも外人と呼ばれ、疎外感を味わうというのです。国籍などどうでもよいのでしょうか。顔、形、生まれも育ちも日本ならば日本人という発想から私たちの日本人という考えが出来るように思えます。ある人はこれを血縁史的アイデンティティとしました。日本で生まれ、血でつながったひとかたまりの一員としての日本

人、その集団に属するという形での自己規定がここにはあるように思えます。「われわれ日本人」とか「私たち日本人」という言い方にこの考えが良く現れていると言われます。ある海外留学生が現地の友人と会食をしたとき、「この料理はわれわれ日本人の舌にあわない」と言ったところ、「料理の味の好みは個人の問題だろう。なぜ、われわれ日本人というような表現で日本人全体に話を広げるのか」と詰問されたという。確かに日本人ならば誰もがこの味を好まないと言う言い方は変な言い方です。しかしこの「われわれ日本人」という表現は私たちも無意識によく使う表現です。「われわれ日本人」とは何者なのでしょう。ノーベル賞受賞者が日本人であるといって大いに喜ぶことが悪いといっているわけではありません。四人の科学者が成し遂げた業績に対しノーベル財団は賞を出すことを決定したのでした。その尻馬に乗って自分も誇らしい気分になることに問題があるのかもしれませんが。彼らは日本人だ、そして私も日本人という集団の一員だ、だからうれしい。これでは日本人が受賞理由となったみたいでおいしい。国籍がどこであろうと、研究拠点が外国であろうとそのことが重要なのではなく、あくまでノーベル賞は各研究者の業績に対するものです。そして私たちはこのことを賞賛し、敬意を抱くのです。

さて、本日読みました聖書に、使徒パウロが自分の使徒性について述べております。パウロは生前のイエスの弟子ではありませんでしたし、いやむしろ積極的にイエスの弟子たちを迫害していたユダヤ教徒パウロとして知られていました。ですからパウロが使徒であると名のることには当時も

疑問がありました。しかしパウロ本人は繰り返し自分の使徒であることを主張して止みませんでした。彼の使徒性の根拠は、使徒言行録にも記されているように、彼の回心体験に基づいています。イエスの道に従うものを捕らえようとダマスコへの旅の途中、復活の主イエスに出会ったというものです。これを境に彼はユダヤ教徒パウロからキリスト教徒パウロへと変わったのです。それのみならず、「月足らずで生まれたようなわたし」「使徒の中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者」であることを自覚しながら異邦人の使徒として大きな働きをします。イエスの直弟子であった十二弟子と比べると、パウロの場合、彼を使徒と呼ぶことにはあきらかに當時も躊躇があったと思われませんが、それでもパウロが使徒であることを主張して止まない背後には、パウロ自身のよって立つ根拠があったはずで、それは復活の主イエスとの出会いを経て、じきじきにイエスから召しを受け使徒とされたとの揺るがぬ確信であったと思われまゝ。

パウロの確信とは、彼の信念の強さを言うものではありません。自分の内に根拠があるのではありません。彼は自分自身の卑小さを自覚しています。また、強力な団体に認証され、有力者に後ろ盾となってもらっているわけでもありません。これはまた、血縁というような血筋、血統のよさにも基づいておりません。彼自身の言葉によれば「人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神によって使徒とされた」のです。文字通り彼のよって立つ立場は、ヨハネ福音書一章十二、十三節が語るように「その名を信じる人々に

は神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神よって生まれたのである」という一点にあります。

冒頭のノーベル賞受賞者の「日本人」の問題で、日本人という集団に属することで自己規定することの危うさを述べましたが、パウロの使徒であることの表明記事を聖書で読むとき、これはかなり独特であるにもかかわらず普遍性を持つものではないかと思えてなりません。自分の内外に根拠はない、しかし自己の全存在を支える超越的根拠があるという無根拠の根拠ともいうべきものがあるということです。人々の認証や後ろ盾、血筋のよさがなくても構わないし、これらのものは結局は支えにならない。本当の意味で私たちを支えるのは別にあるのです。わたしたちは何者なのでしょうか。

祈りましょう。

聖なる神。私たちは小さなものであっても、私たちに目を留め、私たちを根底から支えてくださるあなたの恵みと祝福を感謝いたします。どうか、私たちを憐れみ、あなたの使命に生きる者とさせてください。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

(2008・11・10 泉キャンパス礼拝)

# 「熱き永遠」

大学宗教学主任 佐々木 勝彦

## 詩編、第九〇章一〜一七節

1 主よ、あなたは代々にわたしたちの宿るところ。

2 山々が生まれる前から

大地が、人の世が、生み出される前から

世々とこしえに、あなたは神。

3 あなたは人を塵に返し

「人の子よ、帰れ」と仰せになります。

4 千年といえども御目には

昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません。

5 あなたは眠りの中に人を漂わせ

朝が来れば、人は草のように移ろいます。

6 朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい

夕べにはしおれ、枯れて行きます。

7 あなたの怒りにわたしたちは絶え入り  
あなたの憤りに恐れます。

8 あなたはわたしたちの罪を御前に  
隠れた罪を御顔の光の中に置かれます。

9 わたしたちの生涯は御怒りに消え去り  
人生はため息のように消えうせます。

10 人生の年月は七十年程のもです。

健やかな人が八十年を数えても

得るところは労苦と災いにすぎません。

瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります。

11 御怒りの力を誰が知りえましょうか。

あなたを畏れ敬うにつれて

あなたの憤りをも知ることでしょう。

12 生涯の日を正しく数えるように教えてください。

知恵ある心を得ることができましますように。

13 主よ、帰って来てください。

いつまで捨てておられるのですか。

あなたの僕らを力つけてください。

14 朝にはあなたの慈しみに満ち足らせ

生涯、喜び歌い、喜び祝わせてください。

15 あなたがわたしたちを苦しめられた日々と

苦難に遭わされた年月を思つて

わたしたちに喜びを返してください。

16 あなたの僕らが御業を仰ぎ

子らもあなたの威光を仰ぐことができますように。

17 わたしたちの神、主の喜びが

わたしたちの上にありますように。

わたしたちの手の働きを

わたしたちのために確かなものとし

わたしたちの手の働きを

どうか確かなものにしてください。

詩人は「主よ、あなたは代々にわたしたちの宿るところ。山々が生まれる前から、大地が、人の世が、生み出される前から、世々とこしえに、あなたは神（一一二）と語り始めます。日本語では「代々」と「世々」という具合に、同じ発音になる言葉が用いられていますが、後半の「世々とこしえに」は、「永遠から永遠まで」と訳される言葉です。

詩人はまず「主よ」と呼びかけ、そのお方は「永遠」からおられ、わたしたちを創造されたお方である、と歌います。この言葉に唱和するとき、わたしたちは、まずこの「永遠」から出発するようにならねばなりません。たとえその人生がどのようなものであれ、その喜怒哀楽の体験の前に、「永遠」を思いみるかどうか、これが問われています。わたしたちの「時間」の前に、主の「永遠」があるとすれば、そしてこの「永遠」が「時間」を創造し、今なお創造し続けているとすれば、「時間」の経験は、この「永遠」との関係で評価されることになります。

日ごろわたしたちは、「誕生」と「死」の間にある経験に一喜一憂しています。しかしあるとき、その経験「全体」の意味を問わざるをえないときがやってきます。多くの場合、それは「終わり」の意識と共にあらわれます。そもそもこの経験の始まりは何であったのか。そこに何か意味があったのか。そしてわたしたちはどこへ行くのか。どこから来て、どこへ行くのか……。

詩人によると、「時間」は「永遠から」来て、「永遠へ」と向かいます。これはもはやわたしたちの選択の問題ではありません。人は、自ら生まれることも、自ら死なないこともできないからです。



わたしたちに可能なのは、この「時間」と「永遠」の関係を意識し、そのあるべき関係にふさわしく生きることだけです。

ところがこの当たり前のことができなくなっている、と詩人は語ります。

「あなたは人を塵に返し、『人の子よ、帰れ』と仰せになります」(三)との言葉は、創世記三・一九からの引用です。創世記のこの箇所は、アダムが「取って食べるな」と命じられた木の実を食べ、神から叱責される場面の結びの言葉です。ただしこの引用の前半部は、塵から造られた人間が塵に返ること、つまり死ぬことを意味するとしても、後半部もその強調に過ぎないと解釈するかどうかは、意見の分かれるところです。前半部を「呪い」として、後半部を「希望」として解釈することも可能だからです。この場合、「帰れ」は、「立ち返れ」「今、悔い改めてわたしに帰れ、わたしはすでに救いの道を準備しているのだから」(詩八〇・一九参照)と言った意味になります。一三節も「主よ、帰って来てください」と述べています。これも「救い出してください」という祈りに通じる表現です(詩六・五参照)。

この詩編は、生だけでなく死をも神との関係で捉えるように求めています。生も死も被造物としてのわたしたちの出来事だからです。詩人は、この本来的関係を忘れている生と死を、有限な時間をつい永遠と錯覚してしまう生を、神の側に立って「怒り」「憤り」と表現し、その本来的関係の回復を「喜び」と表現しています。一般に、「怒り」とは「抵抗・拒絶」という感情爆発であり、

「喜び」とは「承認・受容」という感情爆発です。前者においてはコミュニケーションの不成立が、後者においてはコミュニケーションの回復がイメージされています。一見、あまりにも擬人論的なこの表現も、創造者なるお方が人間の根本問題である死を「十字架上の死」によって解決なさる方であることを思い起こすならば、むしろ、このように表現せざるをえないことが明らかになります。生も死も、自然の出来事であると同時に「永遠」との関係の問題として捉えられています。両者は、区別できても分離できない関係にあります。この「永遠」の出現を、詩人は「慈しみ・恵み」と呼び、その到来を待ち望んでいます。この「永遠」の到来こそが、わたしたちの「手の働き」に「確かな意味」を与えるからです。

# これはわが体なり

大学宗教授主任 北 博

## 出エジプト記、第二四章九〜一一節

9 モーセはアロン、ナダブ、アビフおよびイスラエルの七十人の長老と一緒に登って行った。10 彼らがイスラエルの神を見ると、その御足の下にはサファアアの敷石のような物があり、それはまさに大空のように澄んでいた。11 神はイスラエルの民の代表者たちに向かって手を伸ばされなかつたので、彼らは神を見て、食べ、また飲んだ。

## マタイによる福音書、第二六章二六節

26 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これはわたしの体である。」

旧約聖書では、時折重要な場面で食事が特別な意味をもって行なわれます。例えば創世記三二章四三―五四節では、緊張関係にあったラバンとヤコブが協定を結び、証拠となる石の傍らで共に食事します。この場合の食事は、一つ間違えば敵どうしとして戦わなければならぬ相手とぎりぎり

りのところで和解した際に行なわれる共同の食事です。それ以外にも、様々な重要な意味を持った共同の食事の記事があちこちに見られますが、食べるという人間の最も基本的また原始的な行為と一緒に「行なう」ということには、理屈では説明しにくい大きな意味があるように思われます。

出エジプト記二四章九―一節は、イスラエルの七十人の長老（つまり民の代表者達）が神を見ながら食事をするという、実に不思議な箇所です。旧約聖書には、神を見た者は死ぬという考えがあります。それに、神と共に食事をするなどという場面は、他に例がありません。ただ、前後の文脈から言えば、神の命令でモーセに導かれてエジプトを脱出し、シナイの麓まで来た民が、神から自分の民であることを宣言され（出一九・六）、神と契約を結ぶ場面なので、それに伴う食事が行なわれることは自然なことのように思われます。

ところで、この箇所を読むと、ある出来事を思い出します。若い頃私は（その頃は東京に住んでいましたが）、山谷と呼ばれるいわゆる寄せ場に出入りしていました。寄せ場というのは多くの日雇い労働者がその日の仕事を求めて集う場所です。当然のことながら仕事にあぶれた人々、働けなくなった人々が、沢山野宿生活をしています。また、そこにはカトリックや日本基督教団、福音派など、多くの様々な教会が入り乱れて活動していました。当時の私は、東北学院大学出身のある牧師が始めた食堂で、皿洗いなどを手伝ったりし、店じまい後は炊き出しと称して雑炊などを車に積んで、公園や川岸、ガード下などで野宿している方々に給食をしていました。また、この食堂には、

カトリックの修道女や修道士、司祭なども出入りしていました。

そんなある日、私はこの食堂で若い修道士と激しい議論をしてしまいました。今から考えると、彼の主張はいわゆる「解放の神学」のややラディカルなものだったと思われるのですが、その頃の私からは、この若い修道士の言うことはあまりに極端で、キリスト教の範囲をまるで逸脱している、と見えたわけです。当時の私は、若さのせいもあって、議論になると全く容赦がありませんでした。彼はとうとう答えに窮してしまい、最後に苦しうに「とにかく一度〈越冬〉を見に来てください」と言いました。

ここで〈越冬〉について、少し説明致します。年末年始はこの会社も休業しますので、工事がなくなって、日雇い労働者達は仕事にあぶれてしまいます。更に、山谷周辺には様々な公共施設が福祉の仕事をしています、それも年末年始には全部閉じてしまいます。結局、その日暮らしをしている山谷の労働者や周辺の野宿生活者達は、寒さが一気に厳しくなる十二月末から一月上旬の厳冬期に、仕事もなく福祉からも放り出されて野宿生活を強いられることになるわけです。当然の話ですが、体力の弱った人は生命の危険が出て来ます。その危険を少しでも緩和するための自衛策として、毎年この時期になると山谷争議団が中心になって、山谷周辺の野宿生活者達がある公園に集め、焚き火をし、毛布や食事を提供する活動が行なわれるのです。当時、キリスト教関係者や医療関係者など、かなりの数の支援者達もボランティアとして活動をしていました。

私は元旦の早朝に、自転車で公園に行きました。途中、着飾った和服姿の幸せそうな家族連れが、あちらこちらで談笑しながら通りを歩いていました。公園は、機動隊によって囲まれ、封鎖されていました。公園内では、あちこちで鉄道の枕木が燃やされ、タールの臭いと煙が立ち込め、まるで戦場のようでした。その中を、スキンヘッドで小指のない一見してヤクザと分かる一人の男が、争議団の吊るし上げを受けていました。彼は現場に労働者の数を揃えて連れて行くいわゆる手配師で、ある労働者に暴行を働いたことで糾弾されたそうです。彼は台の上に立たされ、マイクで罵られたりからかわれたり、正座させられたりしながら、結局六時間も糾弾を受け続けました。

私はと言うと、医療班に配属され、薬箱等の入ったかばんを提げて、公園とその周辺を巡回しました。医師や看護師は重症患者への対応に追われ、医療班のテントの中は結核などの患者で溢れ、頻繁に救急車がやって来ました。毎日のように患者が搬送先の病院で死んで行きました。山谷では、一冬に百人位の野宿者が亡くなるそうです。医療班は、さながら野戦病院のようでした。巡回していると、沢山の人々が体調不良を訴え、血圧を測ると実際に数値がよくありませんでした。しかし、予算不足のため、余程のことがない限り薬を使うことは許されませんでした。私は医師でも看護師でもありません。それでも私は、すがるような目をして私を「先生」と呼ぶ人々を前に、症状を聞いて診察するふりをし、薬と称して「梅生姜番茶」を飲ませました。不思議なことですが、相手の体の悪い部位に直接手で触れ、さすると、相手の気持ち伝わって来るのです。そうすると相手も

また、少し安心したような表情を見せました。偽医者の方はこのようにして、早朝から食事を取る暇もなく働き続け、やがて日が暮れました。私は心身ともに疲れ果てていました。

私は食事を取るよう言われ、大勢の野宿者達と共に給食の列に並びました。ところが食事を持って医療班に戻ると、立錐の余地もない有様で、座る場所はありませんでした。私は仕方なく、野宿者達に混じって公園の地面に腰を下ろしました。粗末な器は汚く、各自が食事後自分でざっと洗ったものをそのまま使っていました。それだけでも、器の中の雑炊を口に入れることには、気持ちの上でかなり抵抗がありました。暫したためらった挙句、私は意を決し、雑炊を口に入れました。調理した人には本当に申し訳ありませんが、私にはそれがとてもまずいと感じられたのです。同時に、人間は食べなければ死ぬ存在なのだとも感じました。私は雑炊を苦勞して飲み下しました。煙の煤でうす汚れたカーキ色の、黙々と食事する夥しい人の群れの中で、私も野宿者の一人としか見えなかったことでしょう。私は、この群集の中に埋没して食事していることに、不思議な安らぎを覚えました。

その時ある言葉が、ふいに腹の底から嘔吐のように湧き上がり、私の体の中を響き渡りました。私は、〈声〉を聞いたように思ったのです。「これはわが体なり」。それは、イエスが十字架にかけられる前の晩、弟子達と超越しの食事をする際に、パンを裂いて言ったとされる言葉です。

これが私のささやかな神秘体験です。私は、この奇妙な体験をどのように受け止めてよいのか、

当時はよく分かりませんでした。それでも、あまりに衝撃が強かったので、これを単なる異常な精神状態に還元する気にはなれませんでした。私は、この体験の意味を理解し、それを言葉として明確にしたいと思い、そのことが後に神学を志す一つのきっかけとなったのです。



# パウロのメッセージと社会倫理

大学宗教学主任 出村 みや子

ローマの信徒への手紙、第七章一五節〜八章二節

15 わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。16 もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。17 そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。18 わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。19 わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。20 もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしてるのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。21 それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまわっているという法則に気づきます。22 「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、23 わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。24 わたしはなんと惨めな人間なんでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。25 わ

たしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えています。1 従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。2 キリスト・イエスによって命をもたらず霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。

社会のモラルの低下が今日深刻な問題となっていますが、今日お読みした聖書のみ言葉は、こうした人間の意識とモラルとの関わりについて現代人に重要なメッセージを伝えてくれている箇所です。この手紙の著者である使徒パウロはここで、自らの経験を通して人間の弱さと罪の本質について徹底的に明らかにしています。十五節でパウロは、「わたしは、自分のしていることがわかりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです」と述べていますが、これはどのような事態なのでしょうか。

私たちは教育の過程で社会人としてやってよいことと、やってはならないことの区別を家庭で、学校で、友人や先輩との間で、さまざまメディアを通じて繰り返し学んでいます。社会ルールを守るとか、人に迷惑をかけないとか、嘘をつかないとか、人の痛みを知ることなどです。すでにキリスト教学で皆さんが学んでいる「モーセの十戒」には、殺すな、盗むな、姦淫するなといった、神と契約を結ぶ民としてのふさわしい生き方が記されており、それらの規定は今日の社会道徳に大

きな影響を与えています。私たちは誰でも、敢えて悪を行って人間関係や自らの将来を台無しにしようとは思わないものです。しかしパウロは十九節以下で「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」と言っているのです。

かつて学生時代にある先生が倫理学の授業で、このパウロのテキストについて「ここではわかっていないけど、やめられない」ということを言っているのだと冗談交じりに話していたことが今でも印象に残っています。いつもは真面目な先生が、突然ちょっぴり古いギャグを飛ばしたので、学生は哑然として先生は何を言いたいのだろうと注意を向けたのです。先生は続けて、ギリシア哲学の伝統では、人は知らないから罪を犯すのだ、罪とは自らの無知を自覚しない高慢にある。従って人は学ぶことによって正しい生き方をするができる。罪とは無知である、と教えていた。しかし人間はそんな単純な存在ではないんだよ、と言うのです。

パウロのテキストを見てみましょう。パウロは十八節で「私は、自分の内には、つまり私の肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです」と述べています。人間にはさまざまながらみから、頭ではわかっているのに、行動に移すことができないという現実的弱さがあるのです。私たちは誰しも、そのような心当たりがあるのではないのでしょうか。さらにパウロは十九節以下で「私は自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」と自らの心の分裂状態を告白し、そして「私が望まないことをしているとすれば、

それをしているのは、もはや私ではなく、私の中に住んでいる罪なのです」と述べて、罪に対して人間が徹底的に無力であることを示しつつ、罪の状態からの救いを主イエス・キリストの救いに求めているのです。二四節の「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」というパウロの絶望の叫びが、主イエスの救いを通じて一転して感謝の言葉へと変えられていることに注意したいと思います。八章一、二節でパウロは、「従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです」と述べています。これはキリストを信じる者はもはや罪を犯すことはないということではありません。信じる者にはキリストの導きによって、自らの罪と闘う力が与えられるということなのです。ここに希望があります。

私は西欧哲学史の学びを続けてゆくにつれて、このパウロの罪に関するテキストはその後、ヨーロッパ中世の神学に大きな影響を与えたアウグスティヌスや、西欧近代社会のきっかけとなった宗教改革者ルターもまた自らの罪の問題として悩みつつ取り組んだ重要な箇所であり、いわば西欧精神史の展開の節目ごとに重要な役割を果たした箇所であることを知りました。

アウグスティヌスはゲルマン民族の侵入による西ローマ帝国の崩壊を目前にしながらこの世を去りましたが、彼の書物が奇跡的に破壊を免れたために、その後の中世キリスト教世界の成立にその

神学的基礎を提供することになりました。彼の有名な『告白』という書物第八巻に、彼がいかにみじめな青年時代を送っていたかについて回顧的に述べている箇所があります。彼は倫理的に立派な生き方をしたいと望みながらも、「主よ、私に純潔と克己心をお与え下さい。ただし今ではなく」と祈るのが常であったと述べて、それは主なる神が直ちに彼の願いを聞き届けて肉欲の病を癒してくれては困ると思っていたからであると告白しています。当時彼の魂は激しい分裂状態にあり、実際には肉欲が根絶されるよりもそれが満たされることを望んでいたのです。若き日に自らの罪の問題に苦しんでいたルターもまた、パウロを再発見することで自らの救いを見出したばかりか、当時のヨーロッパ世界を中世の封建的体制から近代社会へと導く重要なきっかけとなりました。

現代のモラルの低下の問題も先に述べたように、知らないからではなく、悪いこととは知りながらも誘惑に負け、偽装が行われ、不正が繰り返されているところにあります。社会のモラルの低下が様々な形でニュースになっていますが、問題はそれが普段は善良な市民や社会的信用のある団体の責任者がつい出来心でとか、魔が差すといった状況で、それまで築いてきた社会的信用や実績を一瞬にして崩壊させてしまうことが生じることです。先日はある有名な大学で学生たちによる大麻の使用が大問題となりましたが、良識あるはずの大学生がなぜ善悪の判断がつかなかったのか、前途ある将来の可能性を自らの軽率な行為によって台無しにしてしまったのか、とても残念なことです。悪魔の囁きに従ってしまったのでしょうか。聖書にはサタンが登場しますが、それが「試みる

者」を意味することは大変興味深いことです。教会で唱えられている「主の祈り」にも、「われらを試みに会わせず、悪より救い給え」という祈りの項目がありますが、この祈りの重要性が年を重ねるごとに実感されます。

キリスト教主義に基づくこの大学が、その創立以来日々の礼拝を大切にしてきたのは、誘惑に陥る人間が何ら特別な存在なのではないということ、聖書によって教えられてきたからです。あるがままの人間は自己中心的な存在であり、人間の内には善が住んでいないという罪の現実を認めてきたからです。学生の皆さんにはこの機会にぜひ、パウロの人間理解を追体験しつつ自らの言葉で表現したアウグスティヌスの『告白』という書物や、ルターの『キリスト者の自由』といった書物を読んでいただきたいと思うのです。

# 空しさの中で

大学宗教研主任 村上みか

コヘレトの言葉、第一章一〜七節、第二章一〜三節、十〜十一節

1 エルサレムの王、ダビデの子、コヘレトの言葉。

2 コヘレトは言う。なんとという空しさ。なんとという空しさ、すべては空しい。

3 太陽の下、人は労苦するがすべての労苦も何にならう。4 一代過ぎればまた一代が起り、永遠に耐えるのは大地。5 日は昇り、日は沈み、あえぎ戻り、また昇る。6 風は南に向かい北へ巡り、めぐり巡って吹き、風はただ巡りつつ、吹き続ける。7 川はみな海に注ぐが海は満ちることなく、どの川も繰り返すその道程を流れる。

1 わたしはこうつぶやいた。「快樂を追ってみよう、愉快に浸ってみよう。」見よ、それすらも空しかった。2 笑いに対しては、狂気だと言い、快樂に対しては、なんにならうと言った。3 わたしの心は何事も知恵に聞こうとする。しかしなお、この天の下に生きる短い一生の間、何をすれば人の子らは幸福になれるのかを見極めるまで、酒で肉体を刺激し、愚行に身を任せてみようとい心に定めた。

10目に望ましく映るものは何ひとつ拒まず手に入れ、どのような快樂をも余さず試みた。どのような労苦をもわたしの心は楽しんだ。それが労苦からわたしが得た分であった。

しかし、わたしは顧みた。この手の業、労苦の結果のひとつひとつを。見よ、どれも空しく、風を追うようなことであった。太陽の下に、益となるものは何もない。

連休が終わって、再び働きに勤しむ日常の日々が戻ってきました。皆さんにとっては、学びの生活が再開したわけですが、休み明けで何をするのにもだるいような、そのような物憂い時期を過ごされているのではないのでしょうか。もっと休みがあったらよいのに、あるいはもっと他に楽しいことがあるのにと、学校に来て勉強しなければならぬわが身の現実を嘆いておられるかもしれません。こんなに勉強して何になるのか、多少努力したところで、将来どれほどのものになるのだろうか、特に上級生になると、そのような不安も混じった倦怠感を多少なりとももたれるのではないのでしょうか。そして社会に出て働き始めても、そのような思いはおそらく変わらず、それどころか、さらに増してくるかもしれません。

先の聖書の箇所にも、そのような人の思いが表現されています。「コヘレトは言う。なんと空しさ、なんという空しさ、すべては空しい。太陽の下、人は労苦するが、すべての労苦も何になる。一代過ぎればまた一代が起り、永遠に耐えるのは大地。」――すべてのものは過ぎ行く存在



で、永遠に留まるものは何もない。時は過ぎ、人の命もやがては朽ちる。そのようなはかない人生の中で、人は働き、労苦するが、それが何になるのか、というのです。そうして人は開き直り、どうせ短い人生ならば、楽しんで暮らそうと思ひ至るのです。「私はこうつぶやいた。快楽を追ってみよう、愉悅に浸ってみよう」―そうして酒で肉体を刺激し、快楽に身を任せようと、多くの屋敷を構え、庭園や果樹園を作り、金銀を蓄え、宝を手に入れ、歌を楽しみ、側女（そばめ）をおくという、人が羨むような快楽を次々に試みてゆきます。しかし、そのときは、それなりに楽しむことは出来たけれども、しばらくたって振り返ってみると、そのどれもが空しかったと言うのです。どのような快楽も風を追うようなもので、何も後に残らない、何の益にもならなかった、笑いに対しては狂気だとさえ思えてきたというのです。永遠に人の心を満たす豊かなものは、どのような快楽の中にもなかったというのです。

今の時代は、この聖書の言葉に表現された空しさがよく理解できる時代ではないでしょうか。物があふれ、子供でさえも高価なパソコンを持ち、若い人たちもおしゃれを楽しみ、食事を楽しみ、旅を楽しむことの出来る時代です。この一見恵まれた日常の中にあつて、しかし私たちは決して満たされたときを過ごしているわけではないようです。毎日のように殺人事件の報道がなされ、なかでも親が子を殺し、また子が親を殺したり、あるいは妻が夫を、また夫が妻を殺すという、一番近いところにいるはずの家族同士が傷つけあう事件が目につきます。そしてインターネットでは殺人

を依頼するサイトがあったり、また学校の裏サイトもあって、子供たちがクラスメートの悪口を言い合うという、恐ろしい現実が私たちの身の周りにあるのです。そのような閉塞感漂う毎日だからでしょう、お笑いがブームになって、テレビのチャンネルをひねると、いろいろと笑わせてくれるプログラムが用意されています。けれども、そのときは面白くて笑ったとしても、そしてそのときは日常の空しさを忘れられたような気になっても、しばらくたつと、やはり空しい現実が変わらずあって、それどころか、人から無理に笑わせてもらった自分の現実に対してさえ、空しさを覚えるのではないでしょうか。「笑いに対しては、狂気だと思った」という聖書の言葉は、まさにそのような私たちの日常を表しているようです。

このように、私たちはきれいに身を整えても、おいしいものを食べても、面白いことを聞いて笑っても、あるいは大きな経済力を持ったとしても、そこには私たちの心を深く満たすものはないのだと聖書の言葉は語ります。しかしそれにも関わらず、私たちはそこに人間の幸福があると思っています、それを求めて努力するのです。教養を身につけ、良い職を得、あるいは業績を上げ、成功を収め、そうやって目に見える豊かさを手に入れようと頑張るのです。しかし、そこには本当の豊かさはないと、聖書は言うのです。

それでは真に人を豊かにするものは何か、それは愛だと聖書は語ります。神を愛し、人を愛するという生き方、そしてそれは身を捧げるという生き方です。自らのために生きるのではなく、つまり、

自分を喜ばせ、楽しませるために、外にあるものを自分の中に取り込んでいくのではなく、逆に自分の持っているものを外に差し出して生きるという生き方です。自分の持っているものを差し出すわけですから、何か損な生き方のような気がしますが、しかしこれが真に他者を満たし、そして自らをも満たす生き方だということです。

このような生き方は、わたしたちの社会の中で決して当たり前のものではありません。しかしこのような生き方があり、それが可能であることを、若き日に憶えていただきたいと思います。そして日常の空しさを感じるなかで、聖書の言葉を思い出し、真に人を豊かにするものとは何か、少しずつ考え始めてみてください。

# 「アロンの子牛」

キリスト教学科長 原 口 尚 彰

出エジプト記、三二章一〜六節 新共同訳を一部訂正

1 モーセが山からなかなか下りてこないのを見て、民がアロンのもとに集まって来て、『さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったのか分からないからです』と言うと、2 アロンは彼らに言った。『あなたたちの妻、息子、娘らが着けている金の耳輪をはずし、わたしのところに持って来なさい。』3 民は全員、着けていた金の耳輪をはずし、アロンのところに持って来た。4 彼はそれを受け取ると、のみで型を作り、若い雄牛の鑄像を造った。すると彼らは、『これこそあなたをエジプトの国から導き上がったあなたの神（神々）だ』と言った。5 アロンはこれを見て、その前に祭壇を築き、『明日、主の祭りを行う』と宣言した。6 彼らは次の朝早く起き、焼き尽くす献げ物を供えた。民は座って飲み食いし、立っては戯れた。

今日の聖書の箇所は有名なアロンの子牛の話です。イスラエルの民はモーセに率いられて隷属の地であるエジプトを脱出してから、シナイ半島の荒野を四〇年間彷徨った後に、約束の地であるカ

ナン、現在のイスラエルの地に入りました。荒野の旅の途上で彼らがシナイ山の麓まで来た時、モーセだけが山上へ招かれて登り、そこに四〇日四〇夜の間留まって十戒を神から授かるという、イスラエルにとって画期的な出来事が起こりました。今日のエピソードはその時に起こった一つの逸脱事件です。モーセがシナイ山上に留まったのは四〇日四〇夜でしたが（出エジプト記二四・一二—一八）、この時間が余りに長いので、民が不安になり、指導者を失ったと思い、自分たちの先頭に立って導く神の像を造って欲しいとモーセの兄弟のアロンに頼んだのがこの始まりです（三二・一）。

アロンはこともあろうに民に身に付けていた金の耳輪を外させ、それを鑄て子牛を作ってやりました（三二・二—四前半）。実は、イスラエルやシリアからは発掘調査により、当時の周辺世界の諸民族が奉じていたバアル宗教の祭壇に用いられた牛の象が見つかっています。バアルとはカナンの神々の最高神であり、天空を支配し気象を司る神とされています。牛の上に見えない姿でバアルが鎮座しているというのが基本的なイメージです。アロンの意図も同様で、天地を創った神、父祖アブラハム・イサク・ヤコブの神、イスラエルを奴隷の地であるエジプトの地から導き出した神は見えざる神であり、子牛の上に見えない形で臨在することだったと思います。しかし、民衆は見えざる神ということでは不安になり、目に見える神を欲して、目に見える子牛の象そのものを神として拝んだようです（三二・四）。彼らは、「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国か

ら導き上ったあなたの神（新共同訳では「神々」だ）と言いました。

これは勿論、刻んだ象を作り、拜んではならないというモーセの十戒の第二戒に違反する行為ですが、見えない唯一の神のみを神として他のものは一切神としてはならないという信仰が大衆レベルではなかなか難しいということを示しています。同じ事は、後の王国時代になり、北王国の創始者ヤラボアムが、北王国の人々の巡礼のためにダンとベテルの国家聖所の祭壇に金の子牛を置いた出来事が示しています（列王記上一二・二八―三三）。目に見えない神の存在を信じて拜むよりは、目に見えるものを拜む方が人間にはずっと楽だからです。

さて、アロンは子牛の前に祭壇を築き、そこで祭儀を行って犠牲を捧げました。聖書は、「民は座って飲み食いし、立っては戯れた」と伝えていきます。これは、子牛の祭壇の前で祭りを行い、そこで祝いの食事がなされ、民が歌舞音曲を捧げたということでしょう。色々な宗教には神々に捧げる華やかな祭りを行うものがあります。例えば、日本では神社にまつわる祭りが多くあります。祭りは神々に捧げる神事であり、神聖なものですが、それを支える地域共同体の人々にとっては、大きな喜びと集団的な高揚を与えるものです。人々は祭りの時には高揚した気分の中で、日常の生活の単調さや辛さを忘れることが出来ますし、集団の一体感を味わうことが出来ます。アロンの子牛の前で大騒ぎしたイスラエルの民の心境も同じ事で、行けども行けども続く荒野の中を苦労して旅する労苦や窮乏を一時的に忘れ、祭りの雰囲気酔ったことだと思えます。しかし、民の騒ぎはシ

ナイ山上のモーセの耳に達し、怒ったモーセは急遽山を下りて、民の騒ぎを鎮め、アロンの子牛を破壊し、強く叱りつけ、処罰をしました。イスラエルの宗教は人の手で作った象を祭壇に安置して拝み、祭りすることによって成り立っているのではなく、見えざる神が父祖アブラハムに語った契約の言葉や、モーセを通して民をエジプトから導き出した歴史的事実や、十戒を通して示された神の意思を毎日の生活の中で守ることにありました。つまり、イスラエルの宗教は非常に倫理的な宗教であることに特色がありました。祭りによる一時的な気分の高揚を与えるよりも、人生の指針を与える律法を学び実践することに価値を置いたのでありました。

新約聖書のヨハネによる福音書の初めの方に、「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである」と書かれています（ヨハネ一・一七）。旧約聖書における神は、律法を厳格に守ることを要求し、非常に厳しい印象が強いのですが、新約聖書はこの神が同時にイエス・キリストの父であり、愛と恵みの神、罪を赦す神であることを告げています。よく親の愛情を受けたことがない者は、人を愛することが出来ないと言います。これは逆に、愛情を受けて育った者は人を愛することが出来るということです。まして、天の父である神は、私たちの一人一人に愛情を注いでいます。ヨハネによる福音書の三章一六節は、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」と語ります。私たちは神によって愛と自由を与えられた者として、キリストに倣っ

て神と人を愛し、喜んで神と人に仕える者でありたいと思います。



# 神の言葉と共に生きる

経済学部教授 佐藤邦廣

ヨハネによる福音書、第一章一〇〜一三節

10言は世にあつた。世は言によって成つたが、世は言を認めなかつた。11言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかつた。12しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。13この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

東北学院大学は、毎日礼拝をします。また、大学は、キリスト教に基づいて設立されています。クリスマスチャンは、毎日曜日に、教会で礼拝をしています。そしてその中心は、聖書である。なぜそれほどまでに聖書は価値があるのか。そもそも、聖書は何を伝えようとしているのか。この問題を、今日の聖書の箇所から考えてみたいと思います。

今日のヨハネによる福音書の1節から今読んだ箇所の重要な言葉を要約的に示しますと、まず神、言と光、世と暗闇と民、自分を受け入れた人、そして、ヨハネであります。18節までを読んできていき

ますと、神とは父なる神を示し、言葉と光はイエス・キリスト、世と暗闇と民とは人間を示していることが解ります。イエス・キリストを中心に、これらの箇所をもう一度組みなおしますと、次のようにいえます。

イエス・キリストは、言として父なる神と共にあって、われわれの世界（万物）と人間を創った。そのイエス・キリストは、自分が神と共に創った人間のすむ世界に、父なる神の独り子として、人間としてきた。このことが、マリアから生まれたイエス・キリストの誕生であり、クリスマスのお出来事である。このイエス・キリストの誕生は、驚くべき出来事である。なぜならば、われわれ人間は、人間の世界しかないと考えている状況下において（イスラエル人は神が存在していることを知っていたとしても）神が存在し、しかもわれわれの世界を創った方が人間としてこの世界に来て、神の言を語ったと告げているからであります。

人間とはまったく異なる、神の御子が、イエス・キリストとして人間の姿で、神を現すために人間社会に来て、神の言葉を語り、人間がどう生きるべきかを教え、人間においては考えられない不思議な業である奇跡を行った。たとえば、湖の上を歩くとか、病人を治すとか、水をぶどう酒に換えなどの記事が、驚くべき業として聖書に記されている。

今日の聖書の箇所を見ますと、イエス・キリストは、恵みと真理、命を与える言として、人を招

く、まことの光として、われわれの世界、この世に來た。しかし、この世の人々は、イエス・キリストを受け入れなかった。イエス・キリストは、悩み、苦しみ、争っている人間を救うために、神の言葉を語り、神の存在を示し、神を信じなさいと語り、自らを神から派遣されたものであり、神の御子であると語った。また、イエス・キリスト自身が、神であること、人々を救うためにきていることを示すために、実際に人々を救い、神に従って生きるとはどういうことかを、この世で生きて示した。しかし、人々は、病気を治してくれる人、不思議なことを行う人として、また權威のある言葉を語る人として、イエスの周りに大勢集まったが、神の御子としては信じなかった。皆さんがご存知のように、結局は、イエス・キリストは、十字架につけられた。

しかし、イエスは神の独り子であると信じる人がいた。6節を見ますと、神から遣わされた人として、ヨハネがいた。ヨハネは、イエス・キリストは、神の御子であることを証言するために、人間として生まれたと記されています。また、弟子たち、そして、少数の女性たちや人々もまた、イエス・キリストを信じた。しかしこの人々が本当に信じたのは、イエス・キリストが、十字架につけられ死んだ後に、イエス・キリストが復活し、イエス・キリストが、弟子たちや少数の人々の前に現れ、そして、天に上った後、聖霊が与えられたことによってであった。

このように、聖書、特に新約聖書は、神がすべての創造者であること、イエス・キリストが、神の子として、この世に生まれたこと、そして、神の言葉を語り、人々を救い、不思議な業を行い、十字架につけられ、三日目に復活したこと、そして天に昇った事実を記述しているとともに、イエス・キリストが、本当に神の子である、神の子であった、と信じた弟子たちの証言からなっている。われわれは、この聖書に記述された言葉、出来事、証言に対して、信頼するのか、信じるのか、問われている。イエス・キリストが、生きていた時代における人々は、イエス・キリストの言葉、行動を実際に見聞きした。しかし、信じ得なかった。それは、われわれ人間の常識、理解を超えていたからといえます。ましてや、イエス・キリストを見聞きしないわれわれはどうして信じることができるのでしょうか。

イエス・キリストは、「求めなさい、そうすれば与えられる。探しなさい、そうすれば見つかる。」(マタイ7:7)といているように、真理を求め続ける人にイエス・キリストは見出される。また、「心の清い人は幸いである、その人たちは神を見る」(マタイ5:8)とも言っている。今日の聖書の箇所では、「この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである」と述べているように、神によって信仰が与えられると述べている。

われわれがイエス・キリストは、神の子であり真理であると知るためには、自然に法則があるよ

うに、人間が生きるうえで真理の法則があるかと問い、「ある」と考えたならば、それを求め、聖書に聞き、礼拝で聖書の言葉を聞くことであろう。そうすると神がその真理を与えてくれると述べている。

2000年にわたり、イエス・キリストは神であるという信仰が継承され、世界に教会が設立され、また、信仰と聖書を土台とする大学が設立されているのは、人間の知恵では計り知れない、神の言葉、神の存在が確信されているからであり、神が人間に働きかけているからであるといえるでしょう。

# 共にいます神

経済学部准教授 松村尚彦

マタイによる福音書、第一章一八〜二五節

18 イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。19 夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」22 この全てのことが起こったのは、主が預言者を通じて言われていたことが実現するためであった。

23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマニエルと呼ばれる。」

この名は「神は我々と共におられる」という意味である。24 ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じた通り、妻を迎え入れ、25 男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そしてその子をイエスと名付けた。

クリスマスが近づいてきました。クリスマスとはイエス様の誕生を祝う日だという事は、皆さんもよくご存知のことでしょう。父親がヨセフ、母親がマリアです。馬小屋で誕生したばかりの幼子イエスの顔をヨセフとマリアが覗き込んでいる。そんな絵をどこかで見たことのある人も多いのではないのでしょうか。

こうした絵やお話として聞くクリスマス物語から、私たちはヨセフとマリアのことを、はじめて子供を授かった幸せなカップルだ、というようにイメージすることが多いと思います。東方から来た博士や、羊飼いたちの祝福のなかで、幼子イエスをマリアが抱き上げたとき、確かに二人は大きな喜びに包まれたことでしょう。しかし聖書が伝えるクリスマスの記事には、そうした幸せな場面ばかりが登場するわけではありません。

たとえば先ほどお読みした聖書の箇所を良く見てみると、ヨセフはマリアの妊娠を大きな戸惑いをもって受け止めていたことがわかります。愛するマリアが、こともあろうに自分の子供ではない子供を宿したというのです。楽しい結婚生活を夢見て婚約したのに、相手に裏切られた。この落胆と失望はどれほどのものだったでしょうか。きっと何が起こったのか分からないで、茫然自失の状態がしばらく続いたことでしょう。

しかしこの心の動揺も収まらないうちに、ヨセフは一つの決断をします。そのことについて聖書は一九節でこう述べています。

「夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切る」と決心した。」

当時のユダヤ社会では、婚約期間中に不倫をした女性は、律法のおきてによって厳罰に処せられることになっていました。しかしヨセフは、マリアのことを表ざたにすることによって、マリアを世間のさらし者にはしたくなかった。だから密かに離縁することを決心したというのです。

とは言っても、それで心のモヤモヤがスッキリ解決したという訳ではありません。その後ヨセフは思い悩み続けます。恐らくマリアのことが気になったのでしょう。当時の社会では、離縁された女性は白い目で見られ、差別される心配がありました。また生まれてくる子は、一生父のいない子として、つらい思いをするのではないかと言う心配もあります。

だからヨセフの悩みは、頭の中でグルグルと回って途切れることがありません。自分はマリアのためを思って、精一杯の「正しい」決断をした。それなのに自分だけでなく、マリアも、そして生まれてくる子供も、これから先大きな重荷を背負いながら一生を過ごさなくてはならない。ああマリアはなんてことをしてくれたのか。こんなことがなければ、なんの心配もなく安心して結婚生活に入ることができたのに。そう思いながら、幾晩も眠れない日々を過ごしたことでしよう。

皆さんの中にも、このように、どうしようもできない問題に直面して、行き詰ったまま、ただオ



ロオロしたり、果然と立ち尽くしてしまう以外は何もできない、そうした経験をしたことのある人がいると思います。私たちが人生において直面する問題が、スッキリと解決できる問題ばかりであれば良いのですが、実際には、どうしても解決することのできない難しい問題に直面させられることがあるのです。

ヨセフも同じ様に、どうしても解決できない問題におち当たって、苦しんでいました。その苦悩の日々のなか、ある夜夢で神の天使の言葉を聴きます。二〇節です。

「このように考えていると、神の天使が夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリヤを迎え入れなさい。マリヤの子は聖霊によって宿ったのである』と。」

この言葉がヨセフに臨んだのは、ヨセフが苦悩の底に沈んでいた時でした。聖書の神は、このように苦悩の底にある人に語りかける神です。問題を解決できた人ではなく、解決できない問題の前に途方にくれている人、何をしたら良いか分からない限界状態の中にうずくまってしまっている人、そうした人に聖書の神は語りかけます。

苦悩の底で「もうダメだ」と諦めようとした瞬間、ヨセフにも大きな変化が訪れました。苦悩の只中で、神が彼と共にいてくださったこと、聖書の言葉で言えば「インマニエル」としての神が

そこにいて下さったこと、そのことに突然気づかされたのです。

この時、神の天使はヨセフに「マリヤを妻として迎え入れよ」と命じます。つまり「マリヤを離縁する」という彼自身の当初の決心とは正反対のことを求められたのです。それにもかかわらず彼は、今度は一切迷うことなく、この神の命令に従い、すぐにマリヤを妻として迎え入れました。

どうしてでしょうか。その秘密はインマニユエルとしての神との出会いにあります。この神との出会いによって、ヨセフは、自分自身の意志ではなく、神の意志に自分を預けること、そこにこそ救いがあることを知ったのです。苦難の中にあつて、人間の本当の救いがどこにあるかを知った。そのことによって頭の中のグルグル回りから解放され、再び苦難から立ち上がる力を与えられていたのです。

クリスマスが近づいてきました。クリスマスとは、ヨセフにとってそうであつたように、私たちにも神様が共にいて下さる、そのことを覚える日だと言ふことができるでしょう。

# 「最初の聖書と讚美歌の日本語訳」

工学部教授 星 宮 務

ヨハネによる福音書、第一章一節〜五節

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は、初めに神と共にあった。3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

今日の礼拝でのテーマは、最初に日本語に訳された聖書と讚美歌の話です。

江戸時代末期、不思議な偶然から最初の日本語訳聖書の翻訳をする事になる日本人の漁民三人がおりました。今日は、キリスト教作家の三浦綾子さんの小説「海嶺」をもとに、その事をご紹介します。

彼らは、岩吉・音吉・久吉と言う三人で、日本近海を航行中に大暴風雨にあって漂流し、現在のカナダのバンクーバー付近にまで流され、アメリカ人に保護された後、イギリスのロンドンに送られ、アフリカの喜望峰を経由して、中国のマカオを経て日本までの世界一周を経験しました。

彼らはマカオ滞在中に二十カ国もの言語を自由に操ることのできるドイツ人の言語学者のヴィツラフと言う人に出会いました。ヴィツラフは聖書の中国語訳を終えて、聖書の日本語への翻訳の夢に燃えておりましたので、三人は彼の翻訳事業を手伝うことになりました。彼らが訳した聖書は、ヨハネによる福音書です。本日拝読したヨハネによる福音書一章一節・二節の箇所は、現在の新共同訳では、

「初めに言（ことば）があった。言は神とともにあった。言は神であった。」  
です。

お手元にある英語訳では

“ In the beginning was the Word, and the Word was with God, and the Word was God.”

となっております。

江戸時代の漂流漁民、岩吉・音吉・久吉の翻訳したこの箇所の訳文をご紹介しますと、

「ハジマリニ カシコイモノゴザル カシコイモノ ゴクラクトモニ ゴザル

ソノカシコイモノハ ゴクラク。」

となっております。

満身に教育も受けていない漁民たちが、一生懸命智恵を絞って翻訳した言葉です。

しかし、この「ことば」に相当する箇所には「カシコイモノ」という表現が使われています。原

文のギリシャ語は

“Logos (Λόγος)”であり、「理性」と言う意味があります。

それを考えると、現在私たちが読んでいる専門家が訳された聖書の訳文や、英語の訳文で使われている、単なる「言葉」という表現よりも、むしろ専門の知識もない漂流漁民によるギュツラフ訳の「賢いもの」、という訳語の方が、人間の理解を超えた尊く賢いものがこの世に現れた、という聖書の本来の意味を正しく表現しているように私には思えてなりません。

聖書のほかの箇所、例えばマタイによる福音書二一章四二節に

「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。

これは主のなさったことで、私たちの目には不思議に見える。」

と言う言葉がありますが、教育のない漁民たちの翻訳文が聖書の原文の内容を正しく伝えてくれている事は、まさにこの言葉に当てはまるのではないか、と私には思えます。

次に、明治時代に横浜からプロテスタント（新教）のキリスト教が入ってきた時に、讃美歌が翻訳されましたが、その初めに翻訳された二つの讃美歌の一つが、本日歌いました四六一番（主われをあいす）であった事をご紹介します。

讃美歌の英語版は簡単な英語でございます。一番・二番の歌詞を当時の日本語訳とともに見てみましょう。

1. Jesus loves me! This I know,

For the Bible tells me so;

Little ones to him belong;

They are weak, but He is strong.

Yes, Jesus loves me, Yes, Jesus loves me..

Yes, Jesus loves me; The Bible tells me so.

2. Jesus loves me! Loves me still.

Though I'm very weak and ill;

That I might from sin be free.

Bled and died up on the tree.

Yes, Jesus loves me, Yes, Jesus loves me..

Yes, Jesus loves me; The Bible tells me so.

耶蘇（いえす）我を愛す

聖書にぞ示す

婦すれは子たち

弱きもつよい

はい 耶蘇愛す はい 耶蘇愛す

はい 耶蘇愛す そう聖書示す

本日最初にうたいました日本語訳の歌詞と比べてみましょう。例えば二番の歌詞の四行目は、現在の日本語では「天よりくんだり 十字架につけり」となっていますが、もとの歌詞を直訳すると「血を流して木の上で死んだ」と言う表現になっております。

どちらかというと抽象的な表現の日本語歌詞よりも、英語の歌詞の方が一層、イエス・キリスト

が十字架の上で血を流して、罪びとである私たちのために死んで下さった、という事が鮮烈なイメージとして描かれているように、私には感じられました。

さて、讚美歌四六一番の上には、「児童」というタイトルがつけられております。もう青年である大学生諸君には、不適當と感じられるかも知れませんが。しかし、「初心忘るべからず」と言う諺（ことわざ）もあるとおり、成長とともに自分の素直な部分は、ともすれば失われがちです。

イエス・キリストは、人々の前で説教しておられる時に、小さな子供たちをそばに呼んで、

「神の国は、このような者たちのものである」（マタイによる福音書十章十四節）

と語られた、と言うことです。大人になった代償として失ったものの大きさを、人々はしみじみと感じたと思います。

本日は、最初に翻訳された聖書の訳を通して、必ずしも外面的に立派に見えるものよりもむしろ、外面的には立派に見えないものの方が素晴らしい場合もある事を、また最初に翻訳された讚美歌を通して、神様の前に子供の様に素直な心を持ち続ける事の大切さ・難しさを学びました。祈ります。

## 「盲人バルティマイ」

工学部機械知能工学科准教授 長 島 慎 二

マルコによる福音書、第十章四十六〜五十二節

46 一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行くとうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。47 ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。48 多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。49 イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」50 盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。51 イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。52 そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

エルサレムの北東、ヨルダン川西岸にエリコという町があります。最近では、パレスチナ自治に関



してニュースでも馴染みの町ですが、古くは、モーセの後を継いだヨシュアに導かれたイスラエルの民が、エジプトを脱出して四十年後に、最初に陥落させた城壁の町です。イエスが弟子たちや群衆とともにこのエリコの町を出ていこうとされた時に事件は起こりました。ひとりの盲人が道端に座っており、イエス様に「わたしを憐れんでください」と叫んだのです。ヨハネによる福音書などを読みますと、当時、目が見えないということが罪の結果であると考えられていたらしく、そのために、このような盲人は肉体的なハンディに加えて、精神的なハンディをも負っていたようです。ですから、この盲人も町に入ることは出来なかったのでしょうか、おそらくは町の外で物乞いをしていたのでしょう。イエス様がエリコの町を出て行こうとされていたときに、イエス様と出会ったのでした。

聖書は、必要なことのみを大変コンパクトにまとめて記してある書物ですので、この男がバルティマイという名前であることは記されておりますが、何歳であり、背の高さがいくらであったかなどについては一切記されておりません。ただ、彼が差別され、物乞いをするしかこの世で生きる術が無かったであろうことが想像されるのです。その物乞いをするしか許されなかった男が、あたりかまわず、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫び続けたと聖書は記しているのです。

イエス様は立ち止まり、この男を呼んでくるように言われました。そのとき、男は上着を脱ぎ捨

て、躍り上がってイエス様のところに来たと聖書は続けて記しています。聖書が「上着を脱ぎ捨て」と記しているからには深い意味があるのでしょう。わたしには、この男がイエス様と出会って、それまでの古い自分を脱ぎ捨てて、新しい命を与えられていった姿が示されているような気がします。それにしても、「躍り上がって」とは、なんとという大きな喜びの表現でしょうか。いったい、わたしたちは、その人生において、何度、人前で躍り上がるような喜びをもつことができるでしょうか。この盲人は、イエス様がきっと盲目を癒してくださるといふ確信があったのでしょうか。目が見えるようになったから躍り上がったのではありません。盲目を癒していただく前に、彼は躍り上がったのです。そこに、彼の信仰が示されています。

確かに、盲人が見えるようになることは、躍り上がるような喜びであるでしょう。しかし、いま肉の目が開いている私たちが躍り上がるような喜びをもっているわけではありません。また、肉の目でイエス様のなされたことを見、また肉の耳でもって、イエス様のなされたことを聞いても躍り上がるような喜びを持つことができるわけでもありません。それが、わたしたちの罪の状態をあらわしているのです。聖書を深く学んでいたはずの律法学者や祭司、あるいはファリサイ派と呼ばれる人々が、イエス様を救い主として認めることができなかった一方で、肉の目が不自由であった被差別者が、イエス様が何者であるかを観ることが出来たのです。その意味で、すでに、私たちにあって身体の不自由は本質的な問題では無くなっているのです。この男の躍り上がるような喜びは、憐

れんでくださいとここから訴えることのできる救い主が来てくださったところに生じているのではないのでしょうか。彼は、目が見えるようになったばかりではなく、聖書に記されているように、イエス様に従う者とされていったのでした。

いま、このわたしの話しを聞いている皆さんも、人に言えないようないろいろな悩みがあるかもしれない。しかし、悲しむことはありません。いま、わたしたちには、すでに福音が宣べ伝えられており、この男のように目では見えなくとも、イエス様がわたしたちの側を歩いていらっしゃるからです。イエス様は、いつでも、わたしたちの「憐れんでください」という叫びを聞いてくださるのです。ですから、イエス様を知ったからには躍り上がるような喜びを分かち合いたいものですね。

# 「国籍は天にあり」

文学部教授 佐藤 司郎

フィリピ信徒への手紙、第三章二〇節

<sup>20</sup>わたしたちの本国ほんこくは天てんにあります

今日は今年度最後の礼拝です。卒業あるいは修了予定の四年生や大学院生にとっては、大学生活の最後のチャペルということになります。それぞれの道に進まれるわけです。神様の祝福を祈ってやみません。

そのような皆さんに、またわたしたちに今朝示された聖書の言葉は、短いけれども、力強い言葉です。「わたしたちの本国は天にあります」。明治時代から使われてきた古い（文語）訳では、「われらの国籍は天にあり」と、今よりもっと簡潔でこころに残る言葉で訳されていました。

「本国」という言葉は国籍ないし市民権という意味ももっている言葉です。ですからこの手紙の筆者使徒パウロは、キリスト者として私たちは、もちろん今生活している共同体の一員、その市民であるけれども、それだけではない、天に国籍をもつ者、神の国の市民権をもつものだと知っているわけです。その意味で二つの現実を生きているといっているのです。

私たちがこの世の、地上の共同体の一員であるだけでなく天的な交わりに属しているということは、何かわれわれ人間が造りだしたもので、こしらえた現実ではありません。むしろそれは、他のものから決して奪われてしまうことのない、社会環境が変わっても変わることのない人間存在の一つの次元を告知しているのです。ヨーロッパ近代の国家と宗教、国家と教会の歴史を私は研究のテーマの一つとしていますが、近代のヨーロッパの歴史は、国家権力が、あるいは他者が絶対に介入できない人間の精神の次元を、長い時間をかけて明らかにしてきた歴史だといってもよいと思います。その意味で、われらの国籍は天にありというこの聖句は、そうした人間の譲り渡すことのできない自由の、まさにマグナカルタ、大憲章と呼ばれてさしつかえない言葉なのです（ロッセムン）。

二十世紀後半から現代のキリスト教に多大の影響を与えた神学者にボンヘッファーという人がいます。知っている人も少なくないと思います。ナチ支配に抵抗し殉教した若き神学者です。彼の遺稿の一つ『現代キリスト教倫理』という本の中に「究極のものと究極以前のもの」というよく知られた、素晴らしい文章があります。これらの言葉を使って今日の聖書を説明することもできます。「究極のもの」とは、国籍は天にありという現実です。簡単にいえば、私たち一人ひとりが神様によって受け入れられているということです。しかし私たちは同時に「究極以前のもの」にも関わって生きていますし、関わって生きざるをえない者です。マルティン・ブーバーの言葉でいうと、人

間は「われ―汝」の関係だけでなく、いつも「われ―それ」の関係も生きないわけにはいかないのです（『我と汝』）。

国籍は天にあり、それは究極以前の世界を絶対なものとしないうことです。さりとてそれを軽視して、究極のものにしか関心を寄せないということでもありません。究極のものに信頼をおいて同時に究極以前の世界に責任を負う、そうした生き方をボンヘッファーはじつにイエス・キリストに見ています。聖書が証しているように、神の子イエスは人となり、人と連帯し、人の苦しみをみな自分のものとして生きた方です。それは十字架へといたる道でした。そしてそれは神のみところに従う歩みであるがゆえに復活へといたる道であったのです。国籍は天にありとは、イエスの生き方です。皆さんが、そして私たちがこのチャペルでもくり返し学んできた、聞いてきたのはそのようなイエスの道です。その道を胸にしまってさらに前進して行ってほしいと思います。

そのようなこれからの歩みのために、最後に一つの言葉を紹介して終わりにします。その言葉とは、これもある神学者（バルト）の言葉ですが、「最後まで一歩手前の真剣さをもって」という言葉です。ここでいう「最後」とは、究極のものです。これはすでに申し上げたように、私たちがみな神によって受け入れられているということです。これは絶対に変わらない。そしてそれ以外のもの、それ以前のものが、自らの力でそれを獲得できるものでもないし、それを揺るがしたりすることもできないものです。究極以前のものが究極のものではない。「一歩手前の真剣さ」というのは、

究極以前のものに、何かそれが絶対的なものであるかのように関わるといふことではない。そうであれば、少し余裕をもって、あるいはユーモアをもって事に当たる、生きるということ。生きていく上で私たちはいかんともしがたいことにぶつかります。しかしそれは絶対的なものではない、究極のものではない。ですからそれに負けてはならない。国籍は天にあり。究極のものを見失わず、今後の人生を歩んでいきたいものです。

(二〇〇九・一・一九 土樋)

because of the love Ruth showed to Naomi by not leaving her. Ruth did not know what would happen to them in the future. She probably doubted she herself would be able to find a husband in a strange, new land. Nevertheless, she chose sacrificially to care for the older and needier Naomi.

God blessed Ruth for the love she showed Naomi. Not only did Ruth find a husband in Judah, the family of Ruth and Boaz would eventually become the ancestors of Israel's greatest king, King David, and, much later, the ancestors of Jesus Christ. Ruth's love not only resulted in a second husband and a son ; her love changed the course of history in a mighty way. Of such is the power of love in God's world. May this love empower even you, today.



secure life would be to return to Moab where she might possibly find a second husband. She is still young and, evidently, quite pretty and charming. Her chances at finding another husband in Moab are probably fairly good. However, she gives up this possibility to remain with the older Naomi and to care for her. It is truly an act of love on Ruth's part, and Naomi is very much aware of the great sacrifice that Ruth is making to stay with her. Indeed, the practical Naomi responds to Ruth's love by trying to find a husband for Ruth among the men in her hometown of Bethlehem in Judah.

In Judah at this time, poor women often went to the grain fields to pick up bits of grain that remained on the ground after the harvest. This was called "gleaning." Gleaning was hard work, but it was often the only way poor people could get enough to eat. Since Ruth is poor, she also goes to the fields to glean, hoping to get enough to feed both herself and Naomi. It so happens that the field she goes to is owned by a relative of Naomi, a man named Boaz. Boaz has heard about Ruth and her great kindness toward Naomi. He is impressed with Ruth and makes certain that things go well with her there in his field. He gives Ruth extra grain for herself and Naomi and makes certain that Ruth is not molested by any of the men in the field. Boaz's kindness to both Ruth and Naomi is rewarded when he is finally able to take Ruth as his wife and to have a child by her.

For Ruth and Naomi, Ruth's marriage to Boaz was a "dream come true." The fulfillment of that dream, however, was only possible

Moabite girls (Ruth and Orpah). However their happiness is short-lived because Mahlon and Chilion also die. Naomi and her two daughters-in-law are now all widows. In the ancient world, life was difficult and dangerous for widows. Indeed, widows in the ancient world had few options for earning a living. Since they had no family to take care of them, they basically had two options in life—they could beg for money, or they could become prostitutes.

It must have been very difficult for each of the women emotionally when she lost her husband. However, with all three husbands gone, their troubles went far beyond their emotional traumas. With all their husbands gone, the three women had no source of support. They were destitute.

As we read the biblical account, we learn that Naomi cares deeply for Ruth and Orpah. She does not want to part from them. However, she also wants what would be best for them, and so she advises them to return to their families in Moab. She herself plans to move back to her own country (Judah). Initially, both girls resist Naomi's pleas. Orpah, however, finally sees the practical wisdom of Naomi's advice and returns to her family in Moab. In the beautiful speech that we read earlier, however, Ruth tells Naomi that she will not leave her. She will accompany her mother-in-law to Judah, and she will live with her there. Naomi's people will become Ruth's people. Ruth will live there with Naomi, and she will die there with Naomi.

Practically speaking, at this point Ruth's best chance for a

# ENGLISH CHAPEL SERVICE

キリスト教学科 David N. Murchie (マーチャー, ディビッド)

## SCRIPTURE READING : Ruth 1 : 15~18, 22

And [Naomi] said, "See, your sister-in-law has gone back to her people and to her gods; return after your sister-in-law." But Ruth said, "Entreat me not to leave you or to return from following you; for where you go I will go, and where you lodge I will lodge; your people shall be my people, and your God my God; where you die I will die, and there will I be buried. May the LORD do so to me and more also if even death parts me from you." And when Naomi saw that she was determined to go with her, she said no more.

So Naomi returned, and Ruth the Moabitess her daughter-in-law with her, who returned from the country of Moab. And they came to Bethlehem at the beginning of barley harvest.

## SERMON : "Love's Power to Change History"

The Old Testament book of Ruth is one of the great romantic short stories of ancient literature. The story is about a family that moves to a foreign country (Moab) because of a famine in their own country (Judah). Their hardships do not end in the new country, however, for the father (Elimelech) soon dies, leaving his wife (Naomi) and two sons (Mahlon and Chilion) to fend for themselves. There is cause for happiness when Mahlon and Chilion marry two

## 編集後記

大学宗教授主任 北 博

格差社会の広がりのために苛立っている人が多いのでしょうか。八つ当たりの無差別的凶悪犯罪が目立つこの頃です。それに、ひき逃げやはねた後の「引きずり殺人」などのニュースを聞くと、命の重さとそれに対する責任が軽んじられる風潮があるのではないかとも思います。加えて最近の経済の悪化には、更に気持ちが悪くなります。皆様には、いかがお過ごしでしょうか。

そんな中でも、無事東北学院大学礼拝説教集第十三号が出来上がりました。お忙しい中で執筆してくださった先生方、そして連絡や編集実務に当たってくださった方々、どうもありがとうございます。また、この一年、大学の礼拝に直接間接お手伝いいただいたすべての方々に、心からの感謝を申し上げます。

東北学院大学では、土樋キャンパス、泉キャンパス、多賀城キャンパスのそれぞれのチャペルにおいて、学期中は日曜と祝日を除く月曜日から土曜日まで、毎朝一校時と二校時の間に礼拝が持たれています。加えて土樋キャンパスでは、特に夜間主コースの学生のために、水曜日の六校時と七校時の間にも夕礼拝が持たれます。この他、三つの寄宿舎でも、寮生のために週一回、それぞれ夕礼拝が持たれています。

ここに収められているのは、そうした二〇〇八年度の本学の礼拝で語られたことの、ほんの一部です。東北学院大学では、礼拝を教育の一環として重視しています。この説教集を通して、本学で行なわれている教育の営みの一端をご理解いただければ幸いです。

アメリカ発の経済不況が日本を直撃しています。既に解雇等による悲惨な現状もいろいろ伝えられ、多くの人が先行きに対する不安の中にいます。それでも、「希望」だけは捨てずにやって行きたいものだと思います。

「涙と共に種を蒔く人は

喜びの歌と共に刈り入れる。

種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は

束ねた穂を背負い

喜びの歌をうたいながら帰ってくる。」（詩編一二六・五―六）

# 大学礼拝説教集

第十三号

二〇〇九年三月三十一日発行

発行責任者 宗教部長 佐々木哲夫

編集責任者 大学宗教主任 北 博

出版社 株式会社 アクトジャパン

問い合わせ先 東北学院大学

宗教事務課

〒980-8511 仙台市青葉区土樋一の三の一

☎〇二二・二六四・六四二八

